

綱要導師の宗学意識

Nichiren Religiosität Bewußtsein von Sankt Nichi Doo.

町 田 是 正

- (1) 本小稿は第四十一回日蓮宗教学研究発表大会（一妙院日導上人二百遠忌記念）における特別記念講演の草稿である。
(2) 本小稿では講演の体裁そのまま残して「であります」調とした。



我等、日蓮門下にとって、常に心しておかなければならない大事なこととして、「日蓮宗学」とは何かノに答える問題があります。それは、宗祖の教えを鑽仰し、且つ実践するという特異な学問的性格からして、単に知的な学習・知識の集積にとどまらず、（行学二道）信行が要請されているからであります。

然し、改めて「日蓮宗学」とは何かノと尋ねられますと、答えることが難かしく、「宗学」の概念を導きだすことに窮するのであります。

※「宗学」の意味、「宗学論」の概要については、渡辺宝陽筆「宗学」（日蓮宗事典一七七一七八頁の当該項目参照されたい。文献としては、浅井要麟著「日蓮聖人教学の研究」（平楽寺書店）。茂田井教享著「日蓮教学の根本問題」（平楽寺書店）。渡辺宝陽著「日蓮宗信行論の研究」（平楽寺書店）。北川前肇著「日蓮教学研究」（平楽寺書店）等を参考とされたい。

綱要導師の宗学意識（町田）

綱要導師の宗学意識（町田）

此処で所謂「伝統宗学」の立場を踏まえて表現することが許されるならば、「日蓮宗学」とは、日蓮聖人を讃仰し、その教義を研究し、そこから醸成されてくる「信」を教学の水準にまで高め、体系化・組織化していく知的作業のことだと思ふのです。

曾て望月敏厚先生は自著『日蓮宗学説史』の中に於て、「宗学とは、教学を宗学体系化の前提となる教義大系」であるとして、簡潔に規定されました。望月先生はその範疇の枠組みをもって、一妙院日導上人の宗学を評価され、日蓮宗教学史上に占める位置について、「本化教学を組織せられ、台学の軌範を脱し、教観一致・信解相即の宗旨を高揚せしめた」とされ、近世日蓮教学の復興者・組織者と位置づけられたのでした。⁽¹⁾

註（一） 望月敏厚著「日蓮宗学説史」（平楽寺書店刊・七五七頁）

一妙院日導上人は、京都臨ヶ峰檀林・関東三大檀林の一つの・中村檀林に笈を負いましたが、その修学生活は赤貧言語に絶する厳しさでありました。しかし屈することなく止暇断眠・刻苦勉強、自ら「宗祖の教えに帰る」ことを研鑽の信条となし、生涯の研鑽の成果を『祖書綱要』（二十三巻）をもって締め括られ、天明九年発星山本妙寺に於て化されたのでした。世寿六十六歳でありました。

日導上人の畢生の大著『祖書綱要』の教学史上に占める意義に就ては、幕末の学僧・堯山優陀那日輝は、⁽²⁾『祖書綱要正義』（二巻）を著して、その序文に於て

予嘗謂我宗有三大宝策、一曰草山集、二曰峨眉集、三曰祖書綱要、而綱要一書專論三宗義。凡在求三仏菩提者有大信力、学三仏乘者、有護法之志、及在家出家初心後心、為三不可不説者、可謂寶策中、最寶策矣。⁽³⁾

註(2) 祖書綱要刪略(本満寺刊本・十頁)所収。

と述べて、深草元政の「草山集」・常在日深の「峨眉集」・一妙日導の「祖書綱要」の三書をもって、日蓮教學史上の三大宝策と賞揚し、就中、『祖書綱要』は日蓮門下の全てが座右必読の書となし、宝策中の最宝策と激賞するところであります。

先師に依る『祖書綱要』についての讃辞は、堯山日輝一人にとどまらず、本圀寺首領院日魯・玉沢妙法華寺境法日春・妙頭寺日遂など、口を揃えて賞揚するところであります。⁽³⁾

註(3) 祖書綱要刪略(昭和二十五年・本満寺刊本)一頁・二頁参照されたい。

(七二六―八〇六)
因に本圀寺日魯は『祖書綱要序』を撰して

近世著述人衆、宗教妙旨貫徹者寡、此編正是骨髓本尊鈔、一皮一肉余諸書二者也……
於其教相、審三昧本迹、究三正權実、論三破立淺深、而升三化導始卒、覈三在滅傍正、而論三体用行意、……
洎其勸門、円三妙解行、奇三特断証、母三無始古仏、而見三理即凡夫。覓三本覺三身、而得三法界依正。⁽⁴⁾

註(4) 祖書綱要刪略(本満寺刊本)一頁・二頁。

と述べて、『祖書綱要』は、宗祖当身ノ大事『観心本尊抄』を骨格として構築体系化された一大宗学書と評し、更に続けて、教観二門の立場から、日蓮教學の綱格を余す処なく論じ尽していると、高い評価を与えているのであります。

綱要導師の宗学意識(町田)

す。

こうした先師の評価を享けて、夙に日蓮宗教学史上に占める位置について、近世一致派日蓮宗学の復興者・組織者と見做され、『綱要導師』と尊称されてきた所であります。

※導師について直接論究した研究論著としては、望月敏厚『日蓮宗学説史』第四篇第六章「一妙院日導の宗学」。執行海秀『日蓮宗教学史』第四篇第三章「一妙日導の宗学組織」。北川前肇『日蓮宗教学研究』第二篇第四章「一妙院日導の願本論」（日蓮宗教学研究所紀要第三号掲載）。稲田海素「祖書綱要並に刪略について」（大崎学报五三号）。北尾日大「日導上人の宗学を評す」（大崎学报七四号）。執行海秀「祖書綱要四種三段判に於ける底上相對について」（榎神二五号）。本田榮秀「綱要導師における首題と観心について」（大崎学报一二九号）。関戸啓造「一妙院日導の本迹論——「祖書綱要」第五十六観心本尊四種三段章にみられる本法三段理解を中心にして」（日蓮宗教学研究所紀要九号）。

さて、日導上人の宗学意識を考察するに当って、夙に先師碩学に依って宗学の復興者、日蓮聖人遺文の研究者、宗学の組織者として位置づけられているのであれば、日導宗学の原点（宗学意識）は、何時・何処・何を契機として培ちかわれ、本化宗学鑽仰の発心へと高められたのでありましょうか。

それは余りにも有名な「本化教学研鑽異体同心之誓状」（所謂「五人同盟起請文」と呼ばれている誓願文に求むることが出来ましょう。誓願文は、上人が二十六歳・いまだ日深と称して、正東山中村檀林に止暇断眠の勉学中、寛延二年・同学同修の盟友——忍宏日龍・義道日到・旨宏日義・好存日芳——と共に、正東講肆のカリキュラムが余りにも台学偏重であったことを憂い、また對外権実論争の敗勢にあった当宗の現状に齒痒いばかりの思いなし、本化宗学の研鑽・復興を表明したものであります。

いま「同盟起請文」の冒頭の願文を紹介してみよう。

……蓋法独不弘必其依人焉……嗚呼吾法欲衰歟。近頃在火宅僧撰一書、無於金言、誣於吾祖仁讓日芳欲抑挫此邪義、尚難申其鋒。吾門之中亦可比彼者少也。不佞等雖不肖二學三台教於正東、十有余年干效。今也不忍見此罵詈謗、發竹馬之儼、符金文而頻欲顯揚吾祖妙化、以故於檀林之近邑並木光明精舎結断金交、為報三仏祖怨之筌蹄……。

註(5) 同盟起請文の全文については、稲田海素「祖書綱要並に同冊略について」(大崎學報五三号・大正八年)を参照されたい。

五人の盟友は、誓願の内容を具体的に全十五箇条に認めています、その第十二条において、

老少不定、仏教之掟、縦五人之内四人死候共一人不可破壞此大願事。若於今世未到時五人共絶命候可期、生々世々之事。

と誓い合うのでありますが、日深即ち日導上人を除いて、日龍・日到・日義・日芳の四人は業半ばにして化され、唯一人、上人のみ起請文の初志を貫き、同盟誓願から星霜三十二年を経て、『祖書綱要』を撰し、並木精舎に於ける熱誠・宗学復興への思いを美事に結実したのであります。

さて、中村講肆の同盟者五人をして、教学の現状を慨嘆させたものは、当時の台学偏重の学風にありました。その事は、同盟起請文の中で「火宅ノ僧」と名指している、浄土真宗・越中大円寺義教が一書を撰して、その著述の中

で、「日蓮ノ徒ハ唯々天台智顛ト申シ、判溪湛然ト云ヒ、肝心ノ日蓮ノ宗義ヲ宣揚スルコトナク、カエツテ日蓮立教ノ法業ヲ没スルニ似タリ」とまで、評せしめた台学一辺倒にあったのでした。

綱要導師の宗学意識（町田）

次に日導上人の生涯における著作の点数をみるのに、『日蓮宗宗学章疏目録』に依れば、(1)五人同盟起請文、(2)祖書綱要二十三卷、(3)法華即身成仏義一卷、(4)草木成仏記一卷、(5)四種三段抄一卷、(6)裁断惑説一卷の六点を挙げていますが、「章疏目録」記載の他に、(一)即身成仏義一卷、(二)安心問答落居一卷、計二点が遺されています。殊に『安心問答落居』は現に身延山久遠寺・身延文庫に原本が収蔵されています。⁽⁸⁾直筆四十五紙の小論です。

註(6)「安心問答落居」が身延文庫に収蔵された経緯について「問答落居」原本の裏表紙に「昭和二十六年六月七日、佐賀市神野町愛敬島国相寺住職松島正憲師より日蓮宗総監増田宣輪師へ贈呈せしを改めて同師より身延文庫へ納む。昭和二十六年十一月二十六日・身延文庫」と奥付がされている。

綱要宗学の真髄にふれる為には、畢生の著『祖書綱要・二十三卷』^(公本二十三卷、別略目六十四卷)を披見しなければなりません^(昭和六十六年十月十一日)が、当研究大会に於ては、『安心問答落居』の内容を一・二紹介を試み、日導宗学・上人の宗学意識がどのようなものか、考察してみたいと思います。

『安心問答落居』は、『祖書綱要』の完成から数カ月後の天明五年六月に脱稿されています。本書はその書名が示すように、「安心」つまり教法の領解とか修行体験によって、心の安らぎを得て動ずることのない不動の境地に住せしめる手段・即ち「観心」の問題を主題としたものであります。この事は、上人の教学が観心主義の傾向が色濃いと評されている事に徴しても、うなづける所であります。そして「落居」と云っていますから、「結論」とか「落着く処」ということ、即ち日導宗学を語り尽し終えたの意になります。

本書を通読しますと、^(第十七問答)(1)畢竟空の吟味。^(第十七問答)(2)種熟脱の三益論。^(第十四、第十七問答)(3)台家と当家との異同。^(第一、第六問答)(4)台当両家の成仏の境位相。

^(第十四、第十七問答)(5)理事観心の事が論じられていますが、主要テーマは「観心」にあります。

『安心問答落居』は、前後十七回の問答形態で宗学論が展開されていますが、問答を仕掛けるのは、天台学と日蓮教学について、相当の博識を誇示する二人の人物が仮托されていて、その名前が善四郎と伝七となっています。この二人の質問に対して、日導上人が「弁ジテ曰ク」とか「評シテ曰ク」と答えて、自らの宗学を提示する形をとっています。

本書の性格が如何なるものか、開巻冒頭の問答部を紹介してみたいと思います。先ず善四郎が学識のある処をひけらかしながら発問して云うのに、

善四郎云、其元御咄合申候節々、夫天台法門、夫理具々々、被仰候、一向御寄付不_レ被_レ成、唯御題目与高祖様迄御執着被_レ成候様相見候。悟之上左様無_レ之、事理一体、妙楽大師円著猶惡被_レ仰候。然悟物不_レ著自由自在物有_レ之云云。⁽⁷⁾

註(7) 安心問答落居(棲神四十二号所収・一四五頁) 参照資料の意識解説は本拙論では省略す。

こうした善四郎の詰問とも云える質問に対して、日導上人は次の様に弁じられます。

弁曰、凡当_レ家所立之迹劣本勝之法門、神力囑累両品付嘱意依、一代聖教正像末三時配当、正法千年小乗權大乘流布時機、像法千年法華經迹門流布時機、末法法華經本門流布時機、像法流布迹門末法流布本門相對、其所弘法門淺深勝劣判、叡山天台宗過時迹門破、末法時国相応本門法門弘玉、是本迹所判大旨、四菩薩造立抄(定遺一六四九)観心本尊得意抄(定遺一二二〇)妙一女抄(定遺一七九八)等皆其意。⁽⁸⁾

註(8) 安心問答落居(棲神四十二号・一四五頁) 昭和定本遺文の頁数は筆者の加筆。

日尊上人は御自身の宗学する立場を弁じられて、「台家が迹門理具の法門、当家が本門事行の法門であることは、法華經の總付嘱・別付嘱の説示に随ったもので、一代聖教を正像末三時に配当し、殊に像法流布の迹門と末法流布の本門とを相對し、その所弘の法門の浅深勝劣を判じ、（定遠五三八一五三九頁）（「開目鈔」）五重相對教判は美事な体系である。天台知願が像法に出でて五時八教を示し、仏教大系を顯わし、教相觀を弘めたことは特筆すべきことではある。宗祖は末法に出現され、広く一切の教學の勝劣を教理の浅深の次第に従って比較され、本門寿命量品で開顯された事の一念三千・妙法五字が末法の要法なりと、忍難慈勝の色読をもって論証されたのである」、と弁じられております。

※綱要導師による教判解釈については、「祖哲綱要刪略」第五章の「法華一部末法為正章」に詳論されている。

次に『安心問答落居』に於て、主要テーマとする「觀心」(meditation 英 die Anschauung 独) について見てみたいと思います。まず「觀心」の意味と典拠に關して、（十二番問答部）『觀心本尊抄』の聖文を借用しています。

本尊抄云。問曰出処既聞^レ之^ヲ。觀心之心如何。答曰觀心者觀^レ我已心^ヲ。見^レ三十法界^ヲ。是^レ云^レ觀心^一也乃至不知^二自具^一、十界百界千如^一一念三千^ニ云^レ云^レ。

註（9） 觀心本尊抄（定遠七〇四頁）安心問答落居（棲神四二号一五八頁）。

借用した『本尊抄』の「出処既ニ之ヲ聞ク」とは、天台の教觀二門の中、觀心修行を示した一念三千論の出典・「摩訶止觀第五」を指していることは周知のところでありましょう。

次に「觀心ノ心如何ン」とは、觀心とはどんな修行をすることですか、の意であります。それに答えて、「答テ曰ク、觀心トハ我が己心ヲ觀ジテ十法界ヲ見ル」とされる。

日導上人が「本尊抄」の聖文を借用されたところを、私の解釈が許されるならば、少しく私見を述べてみたいと思います。

「我が己心ヲ観ジテ十法界ヲ見ル」というのは、^(前段・肯定の世界) 観想の境界にこの身を置いて、心の動搖を静め、智慧を磨き、^(十法界・三千世間) 諸法の眞の形象を見究めることでありましょう。周知のごとく「観」は、梵語の「vip aśyana」の漢訳であって、専心に仏法の理法を観想して悟道を目標にして努力することです。

「我が己心ヲ観ジテ十法界ヲ見ル」とは、繰返して云えば、「己心ヲ観ジテ三千法界ヲ見ルコト」であって、所謂・一念三千（己心がそのまま全宇宙である）とするのです。尚、己心とは、自分自身・存在する自己と解したい。

さらに私見が許されるならば、天台智顗によって、宇宙的な世界（十法界）を、三千世間と示されても、その数値で示される「三千世間」が如何なるものか、実像としてイメージする事は難しいのです。何とも難解な概念であります。

※天台智顗の教学が難解である一例として、「摩訶止観」第二章で「相待妙」（相対的絶対）と「絶対妙」（絶対的絶対）の理論を説き、又「法華玄義」に於て「二而不二」「不二而二」の空仮中の三諦円融の思想を展開する。予備の基礎知識がなく、唐突に「相対をはなれて絶対なく、相対はそのまま絶対である」などと説かれても戸惑うばかりである。

ところで、一念三千の基礎をなす教理は「十界互具」の概念であります。それは天台智顗が、^(卷二) 法華玄義・法華文句等で創唱したものでありますが、さて、日蓮聖人に於て、「十界互具」の教理は、^(世尊二二意) 『戒体即身成仏儀』（定遺十頁）の執筆時より御自身の教学の中に所持されており、それが叡山遊学の天台法華修学・立教開宗を経て、^(世尊三十七意) 『一代聖教大意』（定遺六二・六九頁）『守護国家論』に至りますと「華嚴経ノ如キ八十界互具無シ。方等、般若ノ諸経モ亦十界

ヲ許サズ」（定遺一〇頁）と、十界互具を修することが観心の大事とされ、忍難色説の深まりと共に、理具観心より事行観心へと止揚されていき、『開目鈔』に至って「一念三千は十界互具よりことはじまれり」（定遺五三九頁）とされて、天台智顗の世界観を超えられたのであります。

惟うに、日蓮聖人は十界と十如が相乗して「十界互具」となる世界を観心することが大事とされたのではなからうか。智顗の如く三千ノ世間とか、三千ノ法界と、抽象的概念となり易い世界観をして、十如是と十法界が相乗して十界互具となる十の生存領域が備っていると、極めて具象性を以って教示されました。此処に宗祖の事としての宗教のすばらしさがある様に思います。

さて「観心」とは、己心に十界互具を修するという事になります。観心本尊抄では「観心トハ我が己心ヲ観ジテ十法界ヲ見ル。是ヲ観心ト云フ」（定遺七〇四頁）と教示されます。その「十法界ヲ見ル」とは、限りなき無量無辺の世界、宇宙大千世界を観ることであります。（観るとは、肉眼で対象物を観察する意のことではない。透徹した心眼に依つて生命を見究めることである。）従つて、そうしたマクロ皆な観方からすれば、ミクロ的な個別の小さな事に執着することなく、思想・世界観の違いを超えて、この自己を十法界（端的に表現すれば久遠本仏の生命のこと）の中に置くことが「観心」という事になります。綱要導師は『安心問答落居』の中で

一念三千一心三観我己心中成就、御本尊宝塔中入、当体蓮花仏成タルソト信而時々念々南無妙法蓮花経唱へ給へシ……（10） 禅僧マネシテ悟タルフリハ無益ナルヘシ

註（10） 安心問答落居（棲神四二号一四九頁）。

とされ、単なる観想・冥想・黙想が「観心」でないことを示唆されています。

次いで、日導上人は「観心」の理と事の違ひについて次の様に弁じておられます。

其ノ心ノ十界互具。百界千如。三千世間ノ妙法ヲ観ルニ付ケ、迹本二門事理二観ノ違目アリ。謂ク、台家迹門ノ理観ハ智恵ヲ能観トシ、迷信ヲ所観トス。智恵ヲ能観トスト者、ココニ於テ観穿。観達ト云二義アリ。観穿ト云ハ、智恵ノ利用ヲ以テ、我が心ノ十界互具ノ妙法ヲ覆蔽スルトコロノ惑障ヲ穿滅スルヲ観穿ト云。観達ト云ハ、智恵ヲ以テ己心ノ本源ノ実相ノ処ニ通達スルヲ観達ト云。詮スルトコロ智恵ヲ以テ己心ノ実相ヲ覆蔽スルトコロノ煩惱ヲウガチメシテ己心ノ本源ニ通達シテ、十界互具百界千如三千世間ノ妙法ヲ見届ルヲ観ト云。是レ能観ノ意ナリ。……当家本門ノ事観ノ事行ノ題目ノ能観ヲ観法トシ、本門ノ本尊ヲ所感ノ心相トス。故ニ本尊抄、正ク能観ノ観法を明シテ云、釈尊ノ因行果徳ノ二法ハ妙法蓮花經、五字具足。我等受三持此五字、自然讓与彼因果功徳等云云。行者此讓与受時、無始以来ノ煩惱・業・苦、三道即チ法身・般若・解脱ノ三徳ト転シテ、三千三観即チ我身内成就シテ、肉身即チ無作ノ三身・本門寿量、当体蓮花仏、所住ノ処即チ常在靈山。四土具足ノ本国土妙ナリ。⁽¹¹⁾

註(11) 安心問答落居(樓神四二号一五八一—一五九頁)。

天台智顗に依る摩訶止観を修する根本は、十乘観法と十境とを、衆生の一念に具足する妙説として享受することにあります。さらに云えば、己心に十界互具・一念三千が具足していると覚知すること、つまり不可思議境を覚知することだとしています。

さて斯うした摩訶止観の論を享けつつ、綱要導師は、台家迹門の理の観心、当家本門の事の観心とに弁別して、本

化観心宗学を論じられるのであります。

すでに先にも述べたごとく、天台が智慧を発して、「十法ヲ具ス」とか「此ノ三千・一念ノ心ニアリ」と、十乘・

十境の観心修行をなし、（智慧を発して無明煩惱を消滅して其実を顯る立場）「故ニ称シテ一念三千不可思議境トナス」ことを、摩訶止観の究極となしたのであります

が、それに対して、日蓮聖人は『本尊抄』に於て「本門ノ事観トハ、事行ノ題目ノ能観ヲ観法トナス」と教示される所であつて、日蓮上人もそのまま享受されております。

此処で私の解釈が許されるならば、事の観心とは、末代凡夫の「信」を勧奨したものであります。日蓮聖人は「正シク能観ノ観法ヲ明シテ」、「釈尊ノ因行果徳ノ二法ハ妙法五字ニ具足ス」と教示されていますが、その「因行果徳ノ二法ハ妙法五字ニ具足ス」とは、宗祖の忍難色説の事行によつて祈り込められたものであることを、確かと受けとめることとあります。宗祖の事行によつて祈り込められた妙法五字であるならば、我々日蓮門下にとつて、身口意の三業に受持することが観心となるのではなからうか。

従つて「自然ニ彼ノ因果ノ功徳ヲ譲リ与エ給ウ」と、自然譲与の保証を与えられつつも、その前段で「此ノ五字ヲ受持スレバ」と、事行観心（受持信行）の肝要なることを教唆されています。浅井円道先生は、自然譲与段の解釈に當つて、「釈尊、因行果徳、二法ハ妙法蓮華經、五字具足と教えて十七文字は、文字通り能観の題目を顯わしたものと受けとめて差し支えなからう」（仏典講座・観心本尊抄・一五二頁）と指摘されています。こうした事行観心の享けとめ方は、綱要導師に於ても「本尊抄ニ正シク能観ノ観法ヲ明シテ」（安心問答落居・棲神四二号・一五九頁）と述べて、宗祖の教示を容認されています。

日蓮聖人に於ける題目受持とは、とりも直さず「観心」の勧奨でありましょう。その勧奨の基本には、信心（法華題目抄・定遠）為本の

「信」・以信代慈の「信」が強調されていることは云うまでもありません。何故ならば、現代的なコトバで表現すれば、「信心」は其の個人の主観的な情動 (die Emotion) であつて、熱し易く冷め易い不確定な情緒意識であるからです。ですから日蓮聖人は信心が観心の根本であることを強調されたのだと思うのです。

綱要導師は『安心問答落居』を次の様に締めくくっています。

全ク当家ノ事一念三千ノ観心ヲ遊シタル御本意ノ法門ハ、一期当身ノ大事タル本尊抄ニアル故ニ、彼御書ヲ以テ安心悟道ヲ定ムヘキ事ナリ。……本尊抄云在世ノ本門末法之初一同純円也云云……日本国ハ一同ニ逆縁ナリ。是レ末法本未有善ノ大判ナリ。末法ヲ下種ノ機ト定ムルハ此大判ナリ。故ニ当家ノ意ハ下種ト云ハ逆縁ノ因謗墮惡必申得益ヲ下種ノ益トスト得意ヘシ……是ハ神力品ノ於我滅度後応受持此經是人於仏道決定無有疑ノ經文ノ意ナリ。故ニ我等カ如ク高祖ノ化ヲ受テ信スルモノハ、過去ニ已ニ下種セルモノナリ。……過去ニ已ニ下種アリ。故ニ今日ノ下種ノ題目ヲ受持シテ、本因本果ノ成道ヲ遂、事ノ即身成仏ノ益ヲ得ルナリ。コレヲ疑ウヘカラス。観心本尊抄ハ上ノ順逆ニ縁ニ約シテ、観心ノ法門ヲ明シ玉フ。⁽¹²⁾

註(12) 安心問答落居(棲神四二号・一七二—一七三頁)参。

日蓮宗学の根幹が本尊抄にあることは、本国寺法印日曾が、『祖書綱要』の序文を記して、その一文で「此編正是骨髄本尊鈔、皮肉余諸書者也」(「祖書綱要刪略」本満寺刊本・一頁)と評している事も参考となりましょう。教史上において、綱要宗学は観心主義の傾向が顕著だと評せられるのは、観心本尊抄を宗学の根幹としているからであります。日蓮聖人は「当身ノ大事」たる『本尊抄』の題号に「観心」の二文字を冠せられたのは、末法時機相

綱要導師の宗学意識（町田）

応の事の観心を正修とすべきことを教示しようとされたからでありましょう。日導上人は其の処をとくと領解されたのであります。

「事ノ観心を正修とする」つまり、妙法五字の受持に於て、衆生の機根に上下の別はなく一同に純円なのであります。その事は、允可書と称せられる『持妙法華問答抄』の一文

上根上機は観念観法も然るべし。下根下機は唯信心肝要也。⁽¹³⁾

註（13）持妙法華問答抄・定造二七五頁。

との古来慣用されてきた聖文の解釈にしても、機根の上下の別に依じて「観心」（die Anschauung）と「信心」（das Glaube）とに区別した修行の如くに受けとられ勝ちであります。しかし宗祖の真意は、妙法五字の信行については、観念観法と云い、信心肝要と示されたのであって、両者が事ノ観心であることに相違はないのであります。綱要導師は『安心問答落居』を結ぶに当り、事ノ観心を正修とする機根に上下の別はなく、全て「下種ノ題目ヲ受持シテ、本因本果ノ成道ヲ遂ケ、即身成仏ノ益ヲ得ルナリ」と示されて、『観心本尊抄』に教示される「在世ノ本門ト末法ノ初ハ一同ニ純円ナリ」（定造七一五頁）との要文を確かと享受されています。

日蓮聖人の宗教理念、それは「末法為正」・「末法正機」の四文字八文字をもって間潔に表現される所の独特の法華経観であります。末法当初こそ、^(是好最樂・今留在此)大良業たる法華経が流布されて一切衆生が済度されなければならないとの信念であります。法師品弘経の三軌、^(安・摩・意)宝塔品弘教の三箇の勸宣、^(付闡有在・令法久住・六難九易)勸持品二十行偈色説の勸奨を「身ニ説ミ・身ニ当テ」て^(分付凡疎・遠隔於塔寺・數教見機)未来記の教えに生きられたのは、末法為正の宗教理念に依る所であります。

日蓮聖人は忍難色説・妙法五字受持の観心の正修によって、天台智顗が正修とした十境と十乘観法とを全て「事ノ観心」の中に折りこめて、理具一念三千論を超克されたのでありました。

観心本尊抄では次の様に結要されています。

天晴^レ地明^{ヘナリ}。識^ル三法華^ヲ者^ハ可^レ得^ル三世法^ヲ。歟。不^レ識^ル二念三千^ヲ者^ハ仏起^シ大慈悲^ヲ。五字^ノ内裏^ニ此珠^ヲ令^シ懸^ス末代幼稚^ノ願^ヲ。⁽¹⁴⁾

註(14) 観心本尊抄・定遺七二〇頁。

日蓮聖人の観心の出発点は、『摩訶止観』の観不思議境の解明にありましたが、^(久遠本仏の生命)妙法五字の袋の中に包みこまれた十界互具によって、末法衆生のすべてが救済の掌に在るとの自覚に到達され、妙法五字を信行する当処に^(末法今時)「事ノ一念三千」が実現するとされたのであります。「五字ノ内ニ此珠ヲ裏ミ末代幼稚ノ願ニ懸サシメタモウ」との保証は、題目受持の帰結であり、事ノ観心の帰結であります。末代幼稚の我々は、理屈を云わないで、「懸サシメタマウ」との保証を素直に享受し、「妙法五字ノ珠ヲ懸ケテイタダク」という信受こそ大事ではなからうか。

すでに見たごとく、綱要導師も

全ク当家ノ事一念三千ノ観心ヲ遊シタル御本意ノ法門ハ、一期当身ノ大事タル本尊抄ニアル故ニ、彼御書ヲ以テ安心悟道ヲ定ムベキ事ナリ。⁽¹⁵⁾

註(15) 安心問答落居(後神四二号一七二頁)。

と示されています。事ノ観心とは、理即事・事即理であって、智は事行によって深められ、事行は信によって強め

られ、信は智によって高められていくのであって、智信行が相乗して深まり、高まり、強まっていくところに「事ノ観心」の意義がありましよう。

『安心問答落居』は、大著『祖書綱要』を脱稿して、五人同盟誓願にひとまずしめくくりをつけ、宗学の大綱を成し得た感慨と法悦境に身を置くこと数カ月、緊急に日蓮宗学を開陳しなければならぬ事態が生じ、急拠筆を執ったものであります。『安心問答落居』の末尾に於て

昼夜実ニ寸暇ヲ得ス、但タ指当リ御異論ニ及ヒ候法門計リ、アラアラ申述候

と記しています。余程、何か差し迫った事態が生じ、寸暇の間を縫って緊急に筆をとった事が知られます。そして、御疑ノ法門モ大方解ケ申ヘク事候。南無妙法蓮華経。天明五乙巳年六月十二日。正東山日本寺百五十三世、一妙院日導謹誌。

と結んでいます。この小篇ながら「問答落居」に依って、本化宗学・日蓮宗学も理解されるであろうとされ、緊急の事態に対処し得た満足感が述べられています。『安心問答落居』は、小篇とは云え上人の絶筆にも当るもので、最晩年の熟達した教学が詰めこまれており、正に綱要宗学のダイジェスト版と云えましよう。

一妙院日導上人は、宗祖に帰れ、宗祖にもどれと高唱し、自己の宗学を『祖書綱要』二十三巻に美事に結実して、近世日蓮宗学の復興の法業を成しました。現代の日蓮門下としても、綱要導師の息吹きにふれる事は大切なことでありましよう。

（昭和63・10・20稿）

※ 本小稿は加筆補訂して「大崎学報」（一四六号）に掲載す。